

シラカバ「万能材」に



チップ材から家具に活用

【旭川】旭川地域の旭川家具メーカーや木材研究者ら有志が、道民になじみ深いシラカバの利用促進を図る「白樺プロジェクト」に取り組んでいる。主にチップ材として使われるシラカバで家具を製作。樹皮や樹液も利用できる「万能な道産材」としてブランド化を目指す。19日に旭川市内などで開幕する家具とデザインの祭典「旭川デザインウィーク」(ADW)でシラカバの魅力を発信する。(五十嵐俊介)

北海道を代表する広葉樹の1方9千秒を占め、資源のシラカバは、道内の民有は豊富にある。長してから加工される他の広葉樹と比べ、シラカバの寿命は約60年。幹は直径30

旭川でプロジェクト ブランド化目指す

冬前後で大きな板材にならず、材質が軟らかいイメージがあるため、伐採された9割が製紙用チップ材になっている。

近年、新興国の台頭や資源不足で広葉樹の外材の確保が難しくなり、道産材の注目が高まっている。道立総合研究機構林産試験場(旭川)の秋津裕志研究主幹(59)は2015年から3年かけてシラカバの家具材としての可能性を研究し、「十分な硬さがある。板材の表面は白くて光沢があり、北海道のイメージにも合う」と評価した。

秋津さんが地元企業に活用を呼び掛けると、家具メーカー「木と暮らしの工房」(上川管内東川町)の鳥羽山聡代表(50)が賛同。当時旭川大准教授として家具産業を研究していた横田宏樹

静岡大准教授(41)も加わり、18年11月から月1回ほど会議を重ねて今春、白樺プロジェクトとしてADWへの出展を決めた。今は建築会社やデザイン会社らのメンバー10人で活動している。

19日から23日まで旭川デザインセンター(永山2の10)を主会場に開かれるADWでは、特設ブース約60平方メートルにシラカバのダイニングセットや樹皮をらせん状に巻いた椅子、食器など数十点を展示。飲料用の樹液や、樹液から作った化粧水なども販売する。

家具を製作した鳥羽山代

表は、幹だけでなく樹液や茶葉にできる葉など多様な活用方法があり、成長が早く荒れ地でも育つことを利点に挙げ、「資源として持続性があり、多くの恵みを与えてくれることを伝えたい」と意気込む。

旭川デザインウィークで展示する椅子などを前に、シラカバの魅力を語る鳥羽山代表(打田達也撮影)